

報告

看護学生の異文化理解の変化：パイロット研究 ～「国際看護論」受講前後の比較～

長堀智香子，塙 恵子

つくば国際大学医療保健学部看護学科

連絡責任者：長堀智香子

住所：〒 300-0051 土浦市真鍋 6-8-33

TEL：029-826-6622

FAX：029-826-6776

E-mail：c-nagahori@tius.ac.jp

【要旨】

本研究の目的は、異文化理解尺度の妥当性の検討と国際看護論受講前後の学生の異文化理解の変化について明らかにし、今後の国際看護教育のあり方について検討することである。看護学科4年生72名を対象とし、既存の異文化理解尺度を改変したwebアンケートを国際看護論受講前後で実施し、結果をウィルコクソンの符号付順位検定で分析した。結果、総合得点平均 ($p = 0.010$) および「開発途上国で暮らす人々の芸術文化や服飾文化に興味がある」($p = 0.024$) の項目で統計学的に有意な差がみられた。尺度の妥当性については全体の標本妥当性 MSA が 0.160 (講義前回答) および 0.317 (講義後回答) と共に基準である 0.5 を下回り、十分なサンプルサイズが得られず、検討することが出来なかった。今後の国際看護教育のあり方については、学生が異文化で暮らす人々をイメージ化できるように教授法の工夫が必要である。

キーワード： 異文化理解、国際看護、看護学生

I. 序論

2009 年の看護教育カリキュラム改正にて「看護の統合と実践」分野が創設され、「国際社会において、広い視野に基づき、看護師として諸外国との協力を考えることができること等の内容を含む」等が明記された¹⁾。また、2011 年の「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告」では、「グローバル化、国際化の中での国際看護活動の意義について理解できる」ことが示され²⁾、看護教育における「国際看護」の重要性が唱えられている。

中越らの全国看護系大学 206 校を対象にした調査結果では、回答のあった大学のうち 95.8% が国際看護、国際保健その他国際看護関連科目を開講しており、2008 年からの 5 年間で開講大学数が増加していると報告している³⁾。本学看護学科では、2019 年度の入学生よりこれまで選択科目であった「国際看護論」が 4 年次の必修科目となった。

国際看護・国際看護関連科目には「異文化看護」や「グローバルヘルス」などがある⁴⁾。「国際」という表現が「人種」や「国境」と捉えられやすいのに対し、「異文化看護」という言葉は、Transcultural nursing (文化を超えた看護)、Cross-cultural nursing (異文化間の看護)、Cultural diversity (文化的多様性) に対応する看護の総称として使われることが多い⁴⁾。

これまでの報告では、国際看護・異文化理解に関する教育実践は増えているものの、そのカリキュラムや評価方法は十分とは言えず、事後の客観的評価が明確に行われていないことが課題として挙げられている⁵⁻⁷⁾。

そこで本研究は、異文化理解尺度の妥当性の検討と国際看護論受講前後の看護学生の異文化理解の変化について明らかにし、今後の国際看護教育のあり方について検討することを目的とする。

Ⅱ．研究方法

1. 対象：本学看護学科 4 年生 72 名（男性 14 名、女性 58 名）
2. 調査期間：2025 年 9 月～2025 年 10 月まで
3. 方法：データ収集手段は web アンケートとした。
 - 1) 国際看護論授業 1 週間前に研究の実施をメール文書で説明し、Google Form で作成した 23 項目からなる「異文化理解の変化に関する『講義前』アンケート」を実施した。
 - 2) 国際看護論授業の最終回終了後に Google Form で作成した 23 項目からなる「異文化理解の変化に関する『講義後』アンケート」を実施した。
 - 3) 本調査では沼田⁸⁾が行った日本人大学生の異文化理解に関する質問紙調査によって使用された質問紙を使用した。沼田⁸⁾の調査においては、異文化理解尺度の妥当性が確認されており「柔軟な価値観」「少数派への関心」「ステレオタイプの理解」「自己の社会的立場の認知」の 4 つの因子が抽出された。本研究では、第 2 因子「少数派への関心」の質問項目は国際看護論の授業で開発途上国の内容を取り扱うことが多いため、文言を以下のように変更した。

・「アイヌ民族の芸術文化や服飾文化に興味がある」を「開発途上国で暮らす人々の芸術文化や服飾文化に興味がある」に変更し

た。

・「アイヌ民族が受けてきた差別の歴史や現状に興味がない」を「開発途上国で暮らす人々が受けてきた差別の歴史や現状に興味がない」に変更した。

・「在日韓国・朝鮮人の歴史や現状を学びたい」を「開発途上国で暮らす人々の歴史や現状を学びたい」に変更した。

・「沖縄米軍基地問題に関して、沖縄の人々がどう考えているのか気になる」を「開発途上国で暮らす人々が自身の国の健康問題をどう考えているのか気になる」に変更した。

質問紙は 23 項目の質問から成り立っており、それぞれの項目に対して「1: 全くそうは思わない」「2: ほとんどそうは思わない」「3: どちらかというと思わない」「4: 少しそう思う」「5: かなりそう思う」「6: 非常にそう思う」の中から当てはまるものを 1 つ選んでもらうという 6 段階評定法の形式である。質問の順番は沼田⁸⁾の手順と同様にランダムに並べて作成した。使用した質問票の項目は表 1 のとおりである。

4) 授業概要

表 1 に本科目の授業概要を示す。本科目の目的は「世界の健康問題を把握し、それに対する我が国の取り組み、および国際看護活動の実際を通じ、グローバル社会における看護の役割と課題を理解する」である。目標は、①国際社会の現状と課題を踏まえ、国際看護の概念と目的、および国際看護の枠組みを理解できる、②演習を通じて異文化理解を促進し、国際看護活動の対象を理解

した上で、実際の看護活動を考えることができる、③在日・訪日外国人に対する政策と動向を学び、必要な看護活動を考えることができる、の3つを挙げている。授業は講師のアフリカ諸国での実践経験を写真を通じて伝えたり、テキストや視聴覚教材を活用し、事例検討や学生個人の発表など、目的が達成できるように工夫して行っている。

【表 1 挿入】

5) 分析方法

(1) 異文化理解尺度の信頼性に関しては Cronbach の α 係数を求め内的整合性を検討した。

(2) 学生の異文化理解の変化については、点数化した総合得点および各項目の平均が前後のデータ間で統計的な有意差があるかどうかウィルコクソン符号付順位検定で分析した。逆転項目については分析時前に処理をした。統計解析は JMP 18.2.2 (SAS institute) を用い、有意水準は 5% とした。得点化に関しては、あてはまる程度によって 1 から 6 までの得点が与えられ、高得点ほど異文化理解の変化が大きいことを意味する。逆転項目については得点が低いほど異文化理解の変化が大きいことを意味するため、1 を 6、2 を 5、3 を 4、4 を 3、5 を 2、6 を 1 と処理をしてから得点化した。

6) 倫理的配慮

本研究は「ヘルシンキ宣言」、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」および「個人情報保護に関する法律」及び適用

される法令、条例等を遵守して行った。

プライバシーの保護として、質問票は無記名式とした。研究対象者に対し、本研究の目的および方法について、web アンケート送付の際に記載して研究協力を依頼した。調査への協力は自由意思であること、回答しなくても評価などには関係せず、不利益を被ることはないことを明記した。論文での研究結果の公表について協力依頼文書に記載した。質問票への回答をもって研究参加への同意を得たものとした。

データの保管は専用の USB を用いて、研究室の鍵付き書庫にて保管・管理した。本研究に関して利益相反は無い。本研究は、研究者所属の倫理審査委員会の承認を得て実施した。（承認番号：R07-5 号）

Ⅲ 結果

「異文化理解の変化に関する『講義前』アンケート」の回答数は 16（回収率 22.2%）であった。「異文化理解の変化に関する『講義後』アンケート」の回答数は 22（回収率 30.6%）であった。

1. 看護学生の異文化理解の変化尺度について

既存の異文化理解の変化尺度⁸⁾を修正していることから、「看護学生の異文化理解の変化尺度」と命名した（表 2）。尺度の信頼性に関して Cronbach の α 係数（以下、 α 係数）が全 23 項目では 0.45 と低かった。そこで、除外することにより α 係数が高くなる質問項目を高い順からひとつずつ除外し、全体の α 係数が

0.8 を超えるまで続けた。結果、「9 開発途上国で暮らす人々が受けてきた差別の歴史や現状に興味がない」「14 中高年の人は頭が固いと思う」「17 人にさしずめをするような人とは付き合いたいとは思わない」「15 いわゆる高齢者の人とあまり付き合いたいとは思わない」「19 他人のことを深く理解したいとは思わない」「16 他の人の関心事には、それほど興味をそそられない」「21 深く考えなければならないような状況は避けようとする」「13 教師は偉そうに話すと思う」の 8 項目を順に除外することにより、 $\alpha = 0.806$ に上がり、本尺度の内的整合性は認められたと考えた。この尺度を「看護学生の異文化理解の変化尺度（修正版）」と命名した（表 3）。

尺度の妥当性について、因子分析にて解析を計画していたが、全体の標本妥当性 MSA (Measures of Sampling Adequacy) が 0.160（講義前回答）および 0.317（講義後回答）と共に基準である 0.5 を下回り、十分なサンプルサイズが得られず、検討することが出来なかった。そのため、先行研究で示された尺度分類をそのまま使用することとした。

【表 2 表 3 挿入】

2. 国際看護論受講前後の看護学生の異文化理解の変化について

逆転項目の処理をした後に、受講前後の総得点平均、各項目の受講前後の平均、標準偏差を算出した（表 3）。前後の得点の変化をウィルコクソン符号付順位検定で分析した。有意水準は 5%とした。結果、総合得点平均（ $p = 0.010$ ）および項目「開発途上国

で暮らす人々の芸術文化や服飾文化に興味がある」($p = 0.024$)で講義後に得点が上昇し統計学的に有意な差がみられた(表4)。

【表4挿入】

IV 考察

本研究の目的は、異文化理解尺度の妥当性の検討と国際看護論受講前後の学生の異文化理解の変化について明らかにし、今後の国際看護教育のあり方について検討することである。

1. 異文化理解尺度の妥当性の検討

尺度の妥当性について、サンプルサイズが適切ではなく検討することが出来なかった。今回、アンケート収集方法として、回答の簡便さと研究者が当該科目の科目責任者であることの強制力を働かせないためにWebアンケートを用いた。回収率は20～30%を見込んでいたが、尺度項目が当初、23項目であったため、十分なサンプルサイズを得ることが出来なかった。今回、15項目に修正したので、今後、十分なサンプルサイズが得られるようなデータ収集方法を検討し、今後、今回使用した尺度の妥当性を検討する。また、受講後に回収率が上がっているので、事前の説明を丁寧に行うことにより、さらに回収率を上げることが出来ると考える。

2. 国際看護論受講前後の学生の異文化理解の変化

看護学生の異文化理解の変化尺度(修正版)15項目総得点平均が受講前後で有意差がみられた。項目別では〈第2因子〉「少数

派への関心」の「開発途上国で暮らす人々の芸術文化や服飾文化に興味がある」のみであった。本科目は講師である筆者が開発途上国で国際看護の経験があり、講義の内容が偏っていた可能性がある。また、使用するテキストの事例も開発途上国がフィールドであるものが多く、学生が開発途上国に住む人々への異文化理解が深まったと思われる。

3. 今後の国際看護教育のあり方について

元井らが述べているように看護シミュレーション教育は看護場面のイメージ化の成立に有用であることが示されている⁹⁾。国際看護を学ぶ上でも、異文化で暮らす人々をイメージ化させることは重要である。本科目では講義だけではなく写真や視聴覚教材を使用し、国際看護の実際をイメージ化できるように工夫した。また、毎回、各学生が考えることでより想像できるようにアクティブラーニングも取り入れていた。しかし、それだけでは、異文化に暮らす人々を理解するのは難しい。より現実的な体験を通して感じられるような授業方法の検討が必要である。

2023 年度看護系大学に関する実態調査によると、学生の留学や海外研修など、国際交流協定を結んでいる大学は、190 校（65.7%）であり、設置主体では、国立（85.4%）や公立（84.0%）に比較して、私立大学では（57.1%）と低い¹⁰⁾。また、在学生の留学の公費補助は 18.2%であり、希望する学生の経済的負担が課題となっている¹⁰⁾。異文化交流や国際看護の実際を学ぶために、実際に現地に赴き、直接的コミュニケーションを経験するこ

とは、学生の理解度を高めるとの報告がある¹¹⁻¹³⁾。一方、デメリットとして、渡航費・滞在費など学生の負担経費が高額で、参加したくてもできない学生が存在し、学びの環境の公平性が保たれていない¹¹⁾。また、コロナ禍以降、海外研究に代わり ICT や AI が活用されてきている^{14, 15)}。

コロナウイルス感染拡大前において、学生の交流プログラム先の国・地域はヨーロッパ・北米などの先進国や日本から近いアジア地域に偏っており¹⁶⁾、5歳未満の子どもの死亡率が最も高いアフリカ地域の現状を体験させることは、時間的、経済的、安全性の面からも難しい。しかし、「国際」を学ぶにおいて、地域の偏りなく、また、生活・医療環境の厳しい地域の現状を知ることは、わが国の医療の在り方や異文化理解において、学びを深めるために必要なのではないかと考える。

総務省による ICT 普及状況をみると、サブサハラアフリカのスマートフォン普及率は 75% 以上である¹⁷⁾。固定電話やインターネット環境の普及より、携帯電話やスマートホンの普及は首都から遠く離れた農村部でも所有率が高い¹⁷⁾。また、ビデオ通話や動画の配信に関しても、ビデオカメラやパソコンより手軽に持ち運びでき、モバイルデータ通信を利用するため、電波が届けばどんな場所でも利用が可能である¹⁷⁾。このように、ICT の活用により、異文化交流や国際看護の実際を、海外に渡航しなくても、同時双方向で学ぶことが出来るのではないかと考える。多様な教授法を模索して、学生が異文化のイメージ化を促進することが必要である。

また他大学では、大学組織の一環として異文化交流の場を設け

ている¹⁸⁾。外国籍の学生や留学生など学生スタッフを中心に企画運営を行うことで、その国々の暮らしや文化、考え方、政治情勢を知ることは国際看護を学ぶ上でも意味深い。今後、既に国際交流を行っている大学と共同し学生間の交流や情報交換などを行っていくことも、異文化のイメージを促進させるために必要になると考える。

V. 結論

看護学生の異文化理解の変化については、講義前後で得点が上昇し統計学的に有意な差がみられた。尺度の妥当性については十分なサンプルサイズが得られず、検討することが出来なかった。

今後の国際看護教育のあり方については、学生が異文化で暮らす人々をイメージ化できるように、リアルな体験としての海外研修、その代替として現地とオンラインで繋ぐなど、教授法の工夫が必要である。

文献

1) 厚生労働省. 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書.

<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf> (閲覧日：2025年10月14日)

2) 文部科学省. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告.

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/__icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf

(閲覧日：2025年10月14日)

- 3) 中越利佳, 森久美子, 田中祐子・他: わが国の看護基礎教育における国際看護教育の現状と課題. 愛媛県立医療技術大学紀要. 11(1):9-13, 2014.
- 4) 大野夏代: 米国のテキストにおける「異文化看護」の記述内容の検討. 札幌市立大学研究論文集. 1(1):15-21, 2007.
- 5) 石森広美: 高校のグローバル教育におけるアセスメント指標の開発的研究. 東北大学大学院教育学研究科研究年報. 59(1):357-379, 2010.
- 6) 池田香菜子, 長坂水晶: 異文化理解能力の育成を目指したプロジェクトワークの実践ー初中級レベルの多国籍日本語教師を対象とした段階的アプローチの試みー. 日本語教育. 178:215-229, 2021.
- 7) 稲葉みどり: 異文化探求の授業におけるグループ発表を自己評価するー振り返りによる学びの構築をめざしてー. 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要. 4:69-76, 2019.
- 8) 沼田潤: 日本人大学生における異文化理解の現状. 人間環境学研究. 10(2):55-63, 2012.
- 9) 元井好美, 森岡広美, 阿部香織・他: シミュレーション教育における看護学生の学習効果に関する国内文献の検討. 日本シミュレーション医療教育学会雑誌. 11:112-119, 2023.
- 10) 日本看護系大学協議会 データベース委員会. 2023 年度 (2024 年度実施) 『看護系大学に関する実態調査』(日本看護系大学協議会と日本私立看護系大学協会との協働実施).

<https://www.jspcun.or.jp/wp/wpcontent/uploads/2025/06/6b955a23a5a9e92481508f57c247390f.pdf>

(閲覧日：2025 年 10 月 14 日)

11) 蛭田由美, 久保宣子, 山野内靖子：看護基礎教育における国際看護学の教育プログラムの開発に関する研究—わが国の大学看護学科における国際看護学教育の実態—. 八戸学院大学紀要. 54:39-54, 2017.

12) 谷野宏美：わが国の看護学生を対象とした海外研修の動向. 新見公立大学紀要. 36:85-87, 2015.

13) 加藤穰：看護系大学における短期海外研修の現状と課題. 石川看護雑誌. 17:1-10, 2020.

14) 留学ワールド. オンライン留学.

<https://deow.jp/online-study>

(閲覧日：2025 年 10 月 14 日)

15) MRT 宮崎放送. 「メタバース」空間を活用 宮崎大学で海外の学生と交流する授業.

<https://newsdig.tbs.co.jp/articles/mrt/1743734>

(閲覧日：2025 年 10 月 14 日)

16) 日本看護系大学協議会. 2024 年度事業活動報告書.

<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2025/06/2024JigyoKatsudo.pdf>

(閲覧日：2025 年 10 月 14 日)

17) 総務省. 広がる ICT 利活用の可能性.

<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/html/nc144210.html#:~:text=%E7%89%B9%E3%81%AB%E6%9C%80%E3%82%82%E6%99%AE%E5%8F%8A%E7%8E%87%E3%81%8C,4-2-3%EF%BC%89%E3%80%82>

(閲覧日：2025 年 10 月 14 日)

18) 秋葉丈志：早稲田大学 ICC(異文化交流センター)の取り組み
-学生が創り,育てる異文化コミュニティー-. 早稲田日本語教育実
践研究. 12:19-30, 2024.

表1 国際看護論 授業概要

授 業 計 画	回	授業項目	到達目標・学習内容
	1	国際看護学の概念 国際保健の現状と課題	到達目標：なぜ国際看護学が必要とされているかを理解する 学習内容：世界の健康課題について学習する
	2	国際看護活動を推進 する人と機関	到達目標：保健分野における国際機関について理解する 学習内容：国際保健医療協力の仕組みとその活動を学習する
	3	国際看護活動の実際（1）	到達目標：国外において、どのような看護活動がなされているのか理解する 学習内容：国外における国際看護活動の実際を学習する
	4	国際看護活動の実際（2）	到達目標：在日外国人および国外の日本人に対して必要な看護活動を考えることができる 学習内容：在日外国人および国外の日本人に対する国際看護活動の実際を学習する
	5	国際看護活動の実際（3）	到達目標：国外において、どのような看護活動がなされているのか理解する 学習内容：国外における国際看護活動の実際を学習する（演習）
	6	国際看護活動の実際（4）	到達目標：国外において、どのような看護活動がなされているのか理解する 学習内容：国外における国際看護活動の実際を学習する（発表）
	7	異文化理解(1)	到達目標：文化的存在としての人間を理解することができる 学習内容：異文化理解、開発途上国における保健医療の現状と課題について学習する
	8	異文化理解(2)	到達目標：文化的存在としての人間を理解することができる 学習内容：異文化理解、開発途上国における保健医療の現状と課題について学習する

表2：看護学生の異文化理解の変化尺度項目

質問票の番号	
〈第1因子〉「柔軟な価値観」	
1	1 多様な考え方を許容し、自由な発想を大事にする
2	2 いろいろなものの見方からものごとを捉えようとする
3	3 自分にはさまざまな役割があると思う
7	4 従来からある社会の考え方にとらわれず、新しい考え方を尊重する
11	5 相手の立場になってものを考えるようにしている
14	6 日本語が話せない外国人とも積極的に付き合おうと思う
19	7 反対意見でも相手の意見を最後まで聞こうとする
〈第2因子〉「少数派への関心」	
4	8 開発途上国で暮らす人々の芸術文化や服飾文化に興味がある
*8	9 開発途上国で暮らす人々が受けてきた差別の歴史や現状に興味がない
12	10 開発途上国で暮らす人々の歴史や現状を学びたい
15	11 いわゆる障害のある人と積極的に付き合おうと思う
20	12 開発途上国で暮らす人々が自身の国の健康問題をどう考えているのか気になる
〈第3因子〉「ステレオタイプの理解」	
*5	13 教師は偉そうに話すと思う
*9	14 中高年の人は頭が固いと思う
*13	15 いわゆる高齢者の人とあまり付き合いたいとは思わない
*16	16 他の人の関心事には、それほど興味をそそられない
*17	17 人にさしずをするような人とは付き合いたいとは思わない
*18	18 日本で生活する外国人は、日本社会のルールに従うべきである
*21	19 他人のことを深く理解したいとは思わない
*22	20 男性は女性と比べておおざっぱであると思う
*23	21 深く考えなければならないような状況は避けようとする
〈第4因子〉「自己の社会的立場の認知」	
6	22 自分の意見がどのように受け止められているのか気になる
10	23 自分が周りの人たちにどんな影響を与えているのか気になる

*逆転項目

表3：看護学生の異文化理解の変化尺度（修正版）項目

〈第1因子〉「柔軟な価値観」	
1	多様な考え方を許容し，自由な発想を大事にする
2	いろいろなものの見方からものごとを捉えようとする
3	自分にはさまざまな役割があると思う
4	従来からある社会の考え方にとらわれず，新しい考え方を尊重する
5	相手の立場になってものを考えるようにしている
6	日本語が話せない外国人とも積極的に付き合おうと思う
7	反対意見でも相手の意見を最後まで聞こうとする
〈第2因子〉「少数派への関心」	
8	開発途上国で暮らす人々の芸術文化や服飾文化に興味がある
10	開発途上国で暮らす人々の歴史や現状を学びたい
11	いわゆる障害のある人と積極的に付き合おうと思う
12	開発途上国で暮らす人々が自身の国の健康問題をどう考えているのか気になる
〈第3因子〉「ステレオタイプの理解」	
18	日本で生活する外国人は，日本社会のルールに従うべきである
20	男性は女性と比べておおざっぱであると思う
〈第4因子〉「自己の社会的立場の認知」	
22	自分の意見がどのように受け止められているのか気になる
23	自分が周りの人たちにどんな影響を与えているのか気になる

表4：看護学生の異文化理解の変化

	講義前		講義後		P
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
〈第1因子〉「柔軟な価値観」					
1 多様な考え方を許容し、自由な発想を大事にする	4.56	1.03	5.36	0.79	0.134
2 いろいろなものの見方からものごとを捉えようとする	4.69	0.95	5.50	0.67	0.055
3 自分にはさまざまな役割があると思う	4.00	0.82	4.36	1.05	0.146
4 従来からある社会の考え方にとらわれず、新しい考え方を尊重する	4.12	1.15	4.36	1.14	0.577
5 相手の立場になってものを考えるようにしている	5.19	0.98	4.86	1.21	0.072
6 日本語が話せない外国人とも積極的に付き合おうと思う	3.44	1.50	3.82	1.76	0.710
7 反対意見でも相手の意見を最後まで聞こうとする	4.81	0.66	5.23	0.81	0.170
〈第2因子〉「少数派への関心」					
8 開発途上国で暮らす人々の芸術文化や服飾文化に興味がある	3.00	1.51	4.36	1.43	0.024*
10 開発途上国で暮らす人々の歴史や現状を学びたい	3.56	1.50	4.00	1.38	0.459
11 いわゆる障害のある人と積極的に付き合おうと思う	3.56	1.63	3.77	1.41	0.683
12 開発途上国で暮らす人々が自身の国の健康問題をどう考えているのか気になる	3.88	1.45	4.09	1.60	0.995
〈第3因子〉「ステレオタイプの理解」					
18 日本で生活する外国人は、日本社会のルールに従うべきである	2.50	1.26	2.14	1.13	0.312
20 男性は女性と比べておおざっぱであると思う	3.38	1.02	3.09	1.54	0.801
〈第4因子〉「自己の社会的立場の認知」					
22 自分の意見がどのように受け止められているのか気になる	3.69	1.62	4.55	1.50	0.243
23 自分が周りの人たちにどんな影響を与えているのか気になる	3.56	1.21	4.05	1.56	0.472
総得点平均	3.87	0.72	4.24	0.88	0.010*

*P<0.05

ウィルコクソン符号付順位検定

Report

Changes in intercultural understanding
among nursing students: Pilot study
-Comparison before and after taking "International Nursing"-
Chikako NAGAHORI¹⁾, Keiko HANAWA¹⁾

1)Department of Nursing, Faculty of Health Science, Tsukuba
International University

Abstract

The purpose of this study was to examine the validity of the Intercultural Awareness Scale and clarify changes in students' intercultural understanding before and after taking the International Nursing Course, thereby considering future international nursing education. A web-based survey modified from an existing Intercultural Awareness Scale was administered to 72 fourth-year nursing students before and after taking the International Nursing Course. The results were analyzed using a Wilcoxon signed-rank test. Results revealed statistically significant differences in the overall mean score ($p = 0.010$) and the item "I am interested in the arts and clothing culture of people living in developing countries" ($p = 0.024$).

Regarding the validity of the scale, the overall sample validity (MSA) of 0.160 (pre-lecture responses) and 0.317 (post-lecture responses) were both below the standard of 0.5, and the sample size was deemed inappropriate.

In order to shape future international nursing education, it is necessary to devise teaching methods that allow students to visualize people living in different cultures.

Key words: intercultural understanding, international nursing, nursing students